

農耕者と漁労者の比較心理 (4)

A Comparative Psychological Study of Farming and Fishing Villagers

——自然観

Attitudes towards Natural Phenomena and Nature

服部 純子 HATTORI, Sumiko

● 国際基督教大学教育研究所 研究員

Research Associate, ICU Institute for Educational Research and Service



農耕者対漁労者, 自然現象・自然物, 祓忌対聖所

FARMING VS FISHING VILLAGERS, NATURAL PHENOMENA,
NATURE, EXORCISM VS HOLY PLACES

ABSTRACT

The purpose of this study of culture and personality was to investigate the comparative psychology of farming villagers and fishing villagers, in particular, attitudes toward nature: natural phenomena such as sun, wind, rain, etc., as well as natural materials such as plants, mountains, spirits and so on. The research methods employed were based on reference to essays on Japanese farmers and fishermen. Results were obtained by research on points of views regarding how they connect with nature and natural phenomena. Discussion focused on their attitudes and psychological views of nature. Through research on the farmer's connection with nature, the performance of ritual exorcism with utilization of some special plants was particularly marked. Some birds were characterized as evil and fortunate entities. While natural phenomena such as sun, moon, and snow symbolized holy entities, strong wind was considered to be the cause of evil spirits. On the other hand, fishermen regarded mountains as the holy places where a god descends or a god itself resides. They were too sensitive toward the phenomenal change as tide / moon and wind.

背景・目的：

はじめに

高度生長後、物質文明の中で、人々は、四季の風物誌や森羅万象の中に素朴さを見出して生きることを喪失したままである。21世紀を迎える前年の2000年には、象徴的といつていいほど数々の青少年の重犯罪が顕著にみられた。20世紀の抱える闇の部分の累積（親子や夫婦関係を含めた複雑化した社会の諸問題）を感受性の強い若年層が一身に背負い、虚構化した現実の中で、諸問題を露呈化させた事件であるともいえる。自然との共生や調和を失った現代において、かつての人々の自然観は意義深いものであると思われる。

自然を生業にしていた人々は、現代人のように仮想化した現実には逃れることができずに、現実・生活の持つ厳しさと残酷さと闘い、また自然のなかに育まれる命の大切さをいとおしく思い、たくましくいきいきと育てていったのである。知識も自ずと、自然の中で、恐怖し感動し得ていったのである。

漁師にとっての最大の関心事は、漁獲高を左右し、海上での身の安全に関わる、自然現象である。海辺の人々の生活は、天候によって決定づけられてきたといえる。漁を求めて、海上を移動するのに、山や島々、星座等が空間・方位を認識するのに重要な標となった。

農民は、漁師ほど天候には左右されるのではないにしても、作物の成長には、自然現象が多大な影響を及ぼす。太陽や風・雨等の自然現象および自然物への関心は大きいといえる。

本研究では、文化とパーソナリティの観点より、このような漁業者や農業者に関する自然現象や自然物をみていくことで、それらがもたらす意味、心理的側面をみていき、自然観を考察していくことを目的にする。

方法：

農耕者および漁労者と関わりの深いと考えられる自然現象や自然物を選びだし、本研究においては、自然観をみていく。

農業においては、自然現象および自然物・植物（土が生業の場のため）との関連性をみていく。漁業においては、自然物（空間認識のためを含め）および、自然現象との関連をみていく。

自然現象や自然物（太陽・月・星・雪・風・雨や植物、生物、山・島・洞窟・石・貝、火・水、精霊・神霊）とのからみを軸に、彼らの自然観を、文化とパーソナリティの観点から考察していく。

その際に用いた文献・事例に関しては、桜田勝徳（1968）、折口信夫（1976）、瀬川清子（1976）、鳥海延吉（1960）、坪井洋文（1972）、内田武志（1973）がある。

また、結果の記述に関しては、スペースの制限があるが、構造がうきぼりにされるように、説明的な記載とした。

結果：

[1] 農耕者の自然観

(A) 自然物・植物との関わり

(1) 柳と削り花

若木、とくに柳は作物の豊凶を占う削り花に用いられ、正月頃、それで地を叩いて霊を威圧し、作物の順調な成長を願った。沢山枝をつけた稲穂・粟穂・稗穂の擬似花・削り花を、正月、家に飾り豊穰を祈願した。

(2) 躑躅と早乙女

五月の田植え時の早乙女に備えて、女は卯月八日・花祭りに山にこもり、躑躅の花を摘んで下山した。

(3) 菖蒲・躑躅と天道花

農家では、竿頭につけた躑躅が天道花として屋外や軒先に高く挙げられていたり、節句の頃には菖蒲が屋根にのせられ飾られたりした。

(4) 桜と鎮花祭

桜や他の木の花を稲の花の象徴とみなし、稲の花の散るのを遅延させる鎮花祭を行った。また、稲田に害虫が発生すると、人間にも疫病が流行すると考え、稲虫・悪霊を退散させようとする虫送り行事を行った。

(5) 松・杉と標山

田の神への振舞い祭りともされる夏祭りでは、神の降臨する場所に、鉾として松や杉の標山を設け、山車を重視して神迎への行事を行った。

(6) 初穂と抜穂祝

若稲の穂を摘んで、焼米をつくり、神と祖霊に供え、抜穂の日を祝い、翌年の稲の稔りの祈願も託した。

(B) 自然現象および自然物との関わり

(1) 火と御焼き

霜月の末や正月の春田打ち行事の後、土地を暖めて作物の出来をよくする、御火焼きを行った。

(2) 雪と山占い

正月の山の残雪の形で、その年の稲の収穫を占った。

(3) 星と播種

スバル（例：二丈ぐらいの高さに達したときとか）や三つ星等で、稲の播種期の好適期を定めた。

(4) 太陽と天道念仏

梵天を村境に立て、その周りを鉦・太鼓に合わせて踊り、日輪・太陽崇拜と念仏行事を主にした天道念仏で、天候の順調と豊作を祈願した。

(5) 月と十五夜

八月十五夜に、早稲を作神様に供えたり、里芋や豆を供えるイモ名月や豆名月の行事があり、月と信仰した。

(6) 風と風祭り

二百十日といわれる嵐や台風による作物への甚大な被害をおそれ、風の盆や風よけにみられるように、集団で室内に忌みこもりの祭りを行った。

(7) 雨と雨乞祭り

早魃時には田に水が不足するので、悪霊を村境まで村の衆が見送り、太鼓をたたきながら唱え事をし、雨乞いの祭りを行った。

(8) 稲虫と虫送り

稲虫は、恨んで死んだ者の霊でもあり、虫になって稲につくと信じられていたので、虫送りを行った。虫送りも雨乞い同様に唱え事で、お名残り惜しを反復したり、霊を饗応し丁寧に村境まで見送り、災いのもとを断ち切ろうとした。

(9) 鳥と鳥追い

稲穂を鳥に荒らされないように、鳥追い行事を行った。正月四日や七草の初山入りに、山の鶉を呼んで、食物を投げ与える農家の行事は極めて広く行われた。

(10) 蓑笠と田の神

農民の常用品で雨風を防ぐためのものであり、また婚礼の水祝いでも用いるが、だんだんと蓑笠は田の神となった。

(11) 河童と田の神

田の豊穰を祈る川祭りでは、河童は、田の神や福の神とみなされ、田に水をあげるために川や井戸に潜むものとされた。精霊河童を慰めて、悪戯されないように工夫した。

(12) 山と祖霊

農村では、祖霊は山に常住していると信じられているので、山は祖霊信仰の対象となり、稲田に降臨する田の神は、基本的には、山から平地に下りてくると信じられていた。

考察：

(A) 自然物・植物に対する態度

柳(A-1)はとくに、折口¹⁾によると、斎²⁾の木の代表的なもので、物忌みの木であるとみられており、儀式に用いるには、二つの理由があると指摘している。依代として魂を鎮めるためと、その年に作物が豊穰に稔ることを予祝するためのものがあるという。擬似花や削り花に用いることより、類感呪術の心理があらわれ、豊穰祈願が強いことがわかる。その沢山枝をつけた特定の木を用いて、予祝と霊鎮め、また、土地の霊を威圧することより、不作に対する懸念もみられる。

田植え前に、神聖な早乙女の資格を得るため、

躑躅 (A-2) の花を依代に神迎えし、忌み祓いを重視し、清めた稲穂に稲魂が付着することを前提としている。菖蒲と躑躅 (A-3) は、天に向けた花であり、田の神や祖霊の依代のためと考えられるが、折口²は、中陰の内は、亡魂は屋の棟を離れないと考えたり、また屋の棟を精霊の依所と信じられているので、空間に浮遊している靈魂の依代と指摘しており、霊鎮めの思想みられる。また、菖蒲と躑躅も天道花として用いられるが、前者には節句に使用され、後者には早乙女の行事にも用いられるように、祓う要素もみられる。

桜 (A-4) を用いて、鎮花祭を行い、稲の豊作を予祝しようとしたものであるが、悪霊退散の行事も含めており、とくに夏前に祓うことを重視していることがわかる。また、田に稲虫が現れると、人間にも疫病が蔓延するとみなしたり、桜が散る現象と稲の花のそれを重ねてしまい、桜のはかなさに託す心理がみられ、類感呪術的な考え方がみられる。

松や杉 (A-5) は、標山に用いられるところから神の依代とされ神聖視されている樹木であることがわかるが、折口³に指摘されているように、靈魂を鎮める力があつたと考えられる。初穂と拔穂祝 (A-6) では、若稲穂を神に供え感謝し、次の稔りにそなえており、新たに稲魂の付着をのぞんでいることが想定される。

(B) 自然現象および自然物に対する態度

御焼き (B-1) は火を用いる冬の農事祝いで、一年の祝福を行うことと、土地を火で清めて翌年の豊作を祈願するという、二つの特徴がみられる。上述 (A-1) してきたように、削り花を用いて地を祓ったり、また、火で祓い清め、作物を育む土壌の具合をできるだけよくしており、土壌への農民のこだわりには並々ならぬものがある。

雪山占い (B-2) では、粥占いやお釜なりの行事と同様に、収穫を占うのだが、降雪という自然現象で占うことで、超自然な存在を信じて、その存在に収穫を委ねていることが考えられる。星 (B-3) の出現からは、播種期の示唆を得るといふ農耕の折り目ととらえ、星を現実な観点でとらえている。

太陽と天道念仏 (B-4) では、農民にとり、日照は収穫量を左右するものであるので、太陽神へ依代をたてて、御降臨を祈願している様子をうかがうことができる。月 (B-5) への信仰には、農作の守護神とみなしており、豊穰祈願を託していることがわかる。このように、雪、太陽、月には、超自然的な神聖な存在をみている。一方、風よけ (B-6)、雨乞い (B-7)、虫送り (B-8) の行事で明らかなように、悪天候や害虫の発生は、靈魂による災いとした類感呪術の考え方がみられる。

鳥追い (B-9) では、鳥は、稲に災いをもたらすものという前提がみられ、食物を与えて、忌んで避けようとする気持ちがあらわれている。しかし、折口⁴によると、魂の多くは鳥の形で、人間界に現れ、七草では、鳥の形をした常世のマレイトや魂を呼び迎えて、優れた力を食物の中にみいらせようとしたという指摘があり、神聖化した存在とも考えられていた。

蓑笠 (B-10) を田の神とみなすことより、異界の存在を想わせる。折口⁵によると、蓑笠を水祝いの祓えの儀式に用いるという指摘があり、蓑笠に託した田の神を、畏怖の対象としながら、むしろ神格化した存在に近いと農民は考えていたのかもしれない。また、河童 (B-11) を田の神とみなし、河童という水の精霊を重視しており、農民にとって早魃は死活問題であるので、精霊との兼ね合いを重視したのであろう。上述したように、太陽への崇拜も根強いものがみられるが、また、雨乞いの祭りともあいまって、水利の確保はさらに切実な問題であることがうかがわれる。

山 (B-12) には、祖霊が常住しており、稲田にも降臨するという前提が信じられており、山の存在は農民の居住場所と近距離にあり、日常生活にあの世との関わりを深くもち、祖霊という守護神に見守られての農民の生活は、とくに稲という農作物 (畑作物よりも) が軸になり、そこに関わりあいの深いものが農民の自然観としてうきほりにされることがわかる。

結果：

〔Ⅱ〕 漁労者の自然観

(A) 自然物（空間認識のため）との関わり

(1) 山・島と山アテ

良漁場となる岩礁・暗礁などの所在の記憶や、海上の船の位置確認のための陸上の標を山アテと称した。山、岬、岩、白壁、一際高い杉や松の老木等であった。とくに各漁村では、篤く信仰する山が対象になった。また、列島上の大小無数の島々が連なっている地形は漁師にとって都合がよく、山アテの対象となった。

(2) 星座と星アテ

羅針盤代わりとして、なかでも北極星は定点として重視され、カジボシと名付けられる北斗七星は、動く星で舵取りに役立てられた。スバルの位置により漁を開始したりした。

(B) 自然現象および自然物との関わり

(1) 山・島と御神体

漁民は、山そのものを御神体(例：丹沢山地東側の大山)とみなした。大漁時には、網元や船元が、網子や船子にマンイワイの祝着を贈り、それを着用して信仰対象の山に登った。また、不漁時にも、マンナオシのために、同様の人々が山登りをした。また、島そのものを御神体(例：江ノ島全体)として崇拝し、祠を造り祭礼の日を定めて、船で参詣した。

(2) 洞窟と鬼

岩場なので漁の穴場ではあるが、死人を葬る所でもあり、鬼が住む所と信じられていた。鬼の行事がみられ、できる限りの饗応・歓待をして、鬼が去る際に、名残惜しい様子をして送り出すのであった。

(3) 海中石とえびす神

海中から拾いあげた石(例：瀬戸内海女木島の人形の岩)を、漁をもたらずエビス神体として、漁村ではよく祀られた。

(4) 石と入出いるもの

石(例：大洗の磯崎神社の像石)が成長したり、

また、石が割れて神霊が出て来ると、漁村では考えられていた。

(5) 貝がらと呪術

海岸に寄り来る貝を、霊力のある人が呪術に用いたりした。

(6) 鷗と漁

鷗等の海鳥の群れは、鯛の群が到来したことを伝え、また鯛を餌とする鯉、鯖、鯖、いかなどが集まってくるので、その日の漁が約束された。

(7) 鴉と神霊

鯛漁等に用いられるだけでなく、鴉を神聖視してきており、鴉は帰巢本能によって陸地をめざして飛ぶので、危急のさいの伝言にも頼られた。

(8) 若水くみと若潮

正月等に、漁村では家長或いは年男・若男が汲むのは、若水である井戸水・地下水であったが、早朝に潮水を浴びたり、汲みにいったりもした。

(9) 潮と禊

とくに春の^{オオシオ}大汐と、秋の^{ハフシオ}八月汐は、それぞれ禊の日であり、その頃の漁は、大漁に恵まれることが多かった。

(10) 月と位相

日々、月の満ち欠けの周期にあわせて出漁をすることで、漁獲の安定化を図った。

(11) 風と方位

風向きにより、出漁の有無や漁の種類がわかり、また海上での走向先を決めるので、風の向きに細かく名称がつけられた。(例：東風をオチ、山の方からの風をヤマセと呼んだ。)

考察：

自然現象および自然物に対する態度

山アテ(A-1)や星アテ(A-2)より明らかなのは、山や島々等、あるいは星が、漁民にとり、常に水先案内人的存在といえることである。また、篤い信仰を寄せている山がとくに対象になったり、神霊や自然物に守護されて、漁をしていることがうかがわれる。さらに、山・島(B-1)そのものを

御神体とみていたりし、漁を求めて、山アテしながら航海する視線は、自ずと神聖化した山・島の自然物を水平的に眺めることになり、浄化の中の水平思考が生まれてくるのかもしれない。

洞窟 (B-2) には、荒神である鬼がいると漁民はみなし、漁をするうえでその怒りにふれないようにするために、歓待する労を惜しまず、喜んで早く退去してもらおうとしている。洞窟の意味する場所は、この世的には漁をもたらず空間でもあるが、鬼に象徴的なように、人間の深層に畏怖心を募らせるあの世とこの世を結ぶ“再生のための空間” (外間)⁷ といえると思う。

海中の石 (B-3) をえびす神としての霊石として奉り、海の彼方、常世から豊漁をもたらず石という前提がみられ、漁民心理がみられる。また、石 (B-4) でも、入出いるものとするのは、折口⁸の先駆的な見方で明らかなように、石を、空洞のもの、神の入れ物と考えたり、外来魂が付着するという像石信仰^{カクイシ}がみられると思う。付着することで石の成長が可能と漁民は考えている。

貝がら (B-5) は、呪術や神秘の道具として使用され、靈魂を呼ぶ霊能者の呼応する力とあいまって、靈魂の付着的な発想がみられる。鴉と神霊 (B-7) では、鴉を神聖化しているが、救命してくれる、信頼をよせる存在とみなしていることがわかり、農民よりも鴉に対し神聖視する気持ちが強い。また、鷗 (B-6) は、漁という幸をもたらずことで、漁民に糧をもたらし、希望を与えてくれることがわかる。いずれの鳥も、信仰深い漁師にとっては神の使いの存在であったのだろう。

若水くみと若潮 (B-8) については、折口⁹の指摘でみてきたように、早朝の若水は、常世の国からのすで水で、新しい力となっていく、生命の源泉といえる。潮と禊 (B-9) では、大漁の可能性のある潮時に、禊をして漁に臨む。とくに、春季の汐を重視していたことは、琉球諸島では、春潮を浴びると、健康で長寿と考えていたことからもうかがわれ、春の季節、漁にも健康や寿久しくなることを託していたのかもしれない。

月と位相 (B-10) では、新月と満月の時期に魚が採れる場合と、上弦と下弦の時期がよいとみな

される場合があり (秋道¹¹)、漁獲高や漁獲の種類に関わる潮汐現象を大変重視しており、月への依存度が大きいことがうかがわれる。風と方位 (B-11) で明らかなように、風は潮流をかえ漁獲高を左右し、生命の安全にも関わることにより、こと細かい名称がついたのだろう。漁獲高だけでなく、生命の危険も脅かし、また常世とのつながりも誘ってくれる可能性のある、風や潮の動きに、農業者に比べ、漁業者の方は、はるかに敏感にならざるを得なかったことがわかる。

結論：

農耕者の自然観

農民は、柳等の若木、菖蒲・躑躅の忌む作用の強い木や植物を用いて、豊穰祈願のための類感呪術や、予祝と霊鎮めを行い、忌み祓う行事に重きをおいている。とくに作物の順調な成育を祈願し、火の霊力を借りたり、土壌への祓いを大切にしている。害虫が悪霊という前提のもと、桜等の霊鎮花を用いて、類感呪術的な祓いを行ったり、嵐や旱魃等も悪霊の災いとみなしており、水害を恐れ水の確保が必要不可欠なため霊鎮めの祓いを重視する。松や杉の霊力を信じ神聖視しており、霊鎮めの力が強いとみなしている。また、初穂では、神に感謝し稲穂の継承にのぞんでいる。農民にとり、自然との関わりの中で、忌み祓いの精神を大変重視している。

雪、太陽、月は超自然的存在とみなすが、むしろ星には農耕の現実的な目安をもたらししてくれる現象ととらえている。鳥に対しては災いをもたらすものという見方だけでなく、優れた霊力を備え与えてくれる、二極両面を備えた存在とみなしている。山に在住する田の神・祖霊は、農民にとり生業の守護神である。一方、蓑笠や河童という、異界の存在の田の神・精霊には畏怖しながらも神聖視しようとする、ここにも二極両面の心理がみられる。

漁労者の自然観

神聖化した山や島々の自然物を、出漁の中で水平的に眺めてきており、自ずと浄化を重んじる精神を育んできている。洞窟は再生のための空間としての深層心理がみられる。寄り来る石に、幸をもたらすえびす神をみて、縁起かつぎの思考がみられるが、一方、石の中に神霊の成長を想い、その魂を守り神とする、神への依頼と神聖化傾向が強い。また、鳥の存在は漁をもたらすものや神の

使いとみなしており、神聖視傾向が農民より強い。

潮・水は、漁民にとっては、生命の源泉であり、常に禊をして出漁させてくれるような、新鮮な気持を持続させてくれる蘇生水で、とくに春潮の心理的な効用は大きい。潮・月や風向き・台風という自然現象に関しては、潮流を変化させたりするので、漁獲高や安全度といった現実への依存度は高くなり、常に自然や天候の動きに正確で迅速な対応が迫られるので、自然現象に対しては農民ほどには神聖視化していない。

参考文献

- 秋道智弥（1995）. 海洋民族学, 東京大学出版会
上田篤（1993）. 海辺の聖地—日本人と信仰空間, 新潮社
内田武志（1973）. 星の方言と民俗, 岩崎美術社
内海延吉（1960）. 海鳥のなげき, いさな書房
桜田勝徳（1968）. 漁労の伝統, 民俗民芸双書25, 岩崎芸術社
瀬川清子（1976）. 日本人の衣食住, 日本の民俗2, 河出書房新社
外間守善（1999）. 海を渡る神々—死と再生の原脚, 角川書店
坪井洋文（1972）. イモと日本人, 未来社
野木寛一（1993）. 稲作民俗文化論, 雄山閣出版
吉野裕子（1990）. 神々の誕生, 岩波書店

引用文献

- 1 折口信夫（1975）. 全集第二巻, 中央公論社, p.482
- 2 折口信夫（1975）. 全集第二巻, 中央公論社, p.205
- 3 折口信夫（1975）. 全集第二巻, 中央公論社, p.247
- 4 折口信夫（1976）. 全集第十六巻, 中央公論社, p.298—299
- 5 折口信夫（1975）. 全集第一巻, 中央公論社, p.13
- 6 外間守善（1999）. 海を渡る神々—死と再生の原脚, 角川書店, p.40
- 7 折口信夫,（1975）. 全集第三巻, 中央公論社, p.271
- 8 折口信夫（1975）. 全集第二巻, 中央公論社, p.130
- 9 秋道智弥（1995）. 海洋民族学, 東京大学出版会, p.58